

シリーズ レーシング・ストライプの軌跡

— Trajectory of Racing Stripes —

# ハルクニという生き方

## MARTINI RACING

～マルティニ・レーシングの真実～ Part.8

チェーザレ・フィオリオ、リカルド・パトラーゼ、ジャンニ・トンティ……。ここしばらく、ランチャ・コルセの軌跡を辿ってきた当シリーズ。今号からはガラリと雰囲気を変え、日本発のストーリーをお届けする。白地にマルティニ・ストライプを施した1台のフォーミュラカー。トリコロールをまとった“彼女”が鈴鹿を駆け抜けた、26年前のシーズンにスポットを当てる。

photo=原 富治雄/office F&H、i-dea 写真部、Paolo D'Alessio、Boque Archives、CG Library



82年の全日本F1選手権・最終戦、JAFグランプリに登場したチーム・ハルクニのマーチ81Aトヨタ。サイドポンツーンにあしらわれたトリコロールは、まごうかたなきマルティニ・ストライプだ。ドライバーは、前年までの英国F3修業を終えて帰国した鈴木利男。シンデレラ・ボーイの登場に日本のレース界は大いに沸いた。(i-dea)

すべてが型破り

「マルティニ、今度のテーマは何？」  
3月下旬のある昼下がり。いつものように、大好物のメンチカツ弁当を求めて、弊社裏手にある手作りのお弁当屋さん「めんとく」まで、NAVIERのある4階から非常階段を下りていくと、3階の踊り場で一服つけていた、CG編集部の岩尾記者にその声をかけられた。

「えっと、イタリア編はトンティさんのお話でひと区切りです。で、次からは、日本で走っていたマルティニ・カラーのレーサーにスポットを当てようと思います」

「へえ。日本で走ったマルティニ・カラーって、76、77年、富士F1のプラバム・アルファとか、それこそ、82年のWECに来たランチャALC1くらいでしょ？」

「たちどころに正解を羅列する岩尾さん。さすがは、自他共に認ずるマルティニ・シンバである。」

彼の言う通り、実はこのマルティニ・カラー、頻繁にはいわないまでも、時折、日本で開催されるイベントに登場し、サーキットを賑わしている。たとえば、1996年。鈴鹿でたった一度だけ開催されたTTC（インターナショナル・ツーリングカー選手権）には、あのトリコロールをまとったアルファ・ロメオ155V6Tが、ニコラ・ラリーニとアレックスandro・ナニニのドライブで登場。真紅をイメージカラーとする155陣営にあつて、白を基調としたその優美なデザインはスタンドの注目を集めた。

もっとも、アルファ陣営のマルティニ・カラーはこの2台にとどまらず、ガブリエレ・タルキーニとクリスチャン・ダナーのふたりに用意された。赤マルティニも鈴鹿に姿を見せている。紅白で都合4台のマルティニ・カラー。実にめでたい。

もっともその一方では、驚くべき事例も発生している。それが、94年に富士で開催された全日本GT選手権（現・SUPER GTシリーズ）第3戦、富士に登場した、マルティニ・カラーの1台。なんと、ランチャ037ラリーのワークスカー（それも真正銘のホンモノ）をレース用にコンバート。本気でGT300クラスに出走してきたのである。かのトリコロールが、日本のレースイベントに出場した稀有な例である以前に、ラリー専用車とおぼしき、あの、037。が登場した、空前にして絶後のサーキットイベントに違いない。さすがにモンテ仕様の4連式ライトボッドやサファリ仕様のアニマルバンパーといった装備はなかったが、さる好事家がみずからの夢を具現化した。英断。は、かくもインパクトに溢れたもので、いまだに一部レースファンの間で語り草となっている。世界的に見ても稀な、037GTの件は、この稿ですれすれと紹介するつもりだ。

「そうです。で、初回は、フル参戦に敬意を表して、高橋晴邦さんが82年のフォーミュラ・バンフィックで走らせた、白地にトリコロールのマンシングが登場します」

「え、高橋晴邦さん!? ……ってあのハルクニさん!?!」



西新宿にあるハルクニさんの会社、ボクーのオフィスにて。1977年の創業以来、30余年にわたって、経営の最前線に立ち続けている。「業務内容は様々。トヨタの販促誌を作ったり、プロモーションイベントをオーガナイズしたり。初代チェイサーが出たときは、全国のサーキットを巡って、元トヨタ・ワークスドライバーによる同乗走行を目玉にした走行会をやりました」(FH)



82年シーズン、筑波のピット裏でゲストにマシンの成り立ちを解説するハルクニさん。「この頃はまだタバコ吸ってたんだよね。でも、9年前に医者に本数を減らすように勧められて。その日の夜、買い置きしてあったフィリップ・モリス8箱をそのまま捨てて、以来、スッパリやめちゃった」(笑)(BA)

「そうなんです。1年間だけなんですけど、トヨタの元ワークス・ドライバーの高橋晴邦さんが監督で、F1マシンを走らせて。そのスポンサーがマルティニだった、と」

「明日、西新宿のオフィスにお邪魔し

てお話を伺うんですけど、生まれて初めてお目にかかるってあって、もう嬉しいやら、緊張するやら。ボクが中学のときに使ってた下敷きに、ハルクニさんが載ってたんです。初代カマリの展示発表会で行った、トヨタカローラ栃木の真岡営業所でもらった下敷きで、

ちょっと大きめのA4サイズ。表に前目のカムリ2000GTがデーンと写って、で、ひっくり返すと、トヨタ2000GTとかスポーツ800の発表当時の写真が載ってる。で、その脇に、臺雨の富士のヘアピンを立ち上げるライムグリーンのセリカLB

2000GTターボの勇姿がドーン。サイドウィンドウ越しに見えるのは、白地に赤ラインのヘルメット！これが、ハルクニさんなんすよ〜」

術集中を理由に、トヨタがセブンの開発を凍結した後は、特殊ツーリングカーの開発で頭角を現した。例の「下敷き」のセリカLBターボは、そんな高橋晴邦が73年の富士1000kmを制したマシンだ。だが、ほどなく訪れたオイルショックで、トヨタは全面的にモータースポーツから撤退。これと前後して、加藤真幸いるシグマとシヨイント。世界メイクス選手権を目指したが、その中途の74年に渡米し、大学院でマネジメント・サイエンスを修得。75年のルマン24時間レースにもシグマで出場したが、その直後にアツサリ現役を引退。76年の帰国以降は、もっぱらビジネスマンとしての道を貫いた。

「どんな話が飛び出すのかしらん」ひとりそうゴチったところで、件の弁当屋さんに到着。が、いつも笑顔で迎えてくれるおかあさんが、なぜか今日に限って視線を逸らす。……エ？も、もしかして!?

「レースを始めた頃、ものすごく憧れたのがF1でね。当時、世界的に知名度があったジム・ラッセル・レーシングスクールに行くと、そこからF1を目指そうと本気で考えていたんです。でも、周囲のレース仲間にとって当時の夢は、日本でワークスドライバーになること。マシンが与えら

れて、しかもお金をもらって走るんだから、いいよな〜って。実際、入校手続きも進めていたんだけど、トヨタから誘われて、それもアリだなと思っただけです。トヨタと共に世界に打って出る、そんな青写真を描いたんです。実際、トヨタ7あたりまではその通りに進んで。でも、ま

さか(トヨタがレース活動を)やめるとは思ってなかった。で、世界への夢をシグマに託したんだけど、機は熟せず、と」

「いやいや、アメリカへは勉強のために行っただけで、たいした理由がある



取材班を驚かせたハルクニさん所蔵のマルティニ・ジャンパー。「82年シーズンの開幕前に支給されたユニフォームでね。とってもキレイな紺色で、気に入ってプライベートでもよく着ていたんです。なぜか捨てられなくて、26年を経たいまなお、ワードローブの中にあるんですよ」ジッパー部を覆うマルティニ・ストライプは、おもしろさながらの発色を誇る。(NAVI)



1971年7月の富士1000kmにマークII-XRで出走した際のハルクニさん。24歳ながら、すでにトヨタ陣営を率いるエースドライバーの風格が漂う。(CGL)

ふたたび世界へ



82年全日本F1選手権の開幕戦、筑波ラウンドのスタート直後。星野一義のガンメタのマーチ81A・日産を追う鈴木利男。開幕戦時には、まだマルティニのロゴはなく、また、クルマの外観もスポーツカーノーズのまま。同じマシンとはにわかに信じがたいが、当稿冒頭のマルティニ・カラー車は、この純白のクルマをモディファイしたものだ。まばゆいばかりの白が、事実上のトヨタ・ファクトリーチームであることを物語る。ちなみに、マシンにマルティニのロゴが登場するのは、第4戦・筑波以降のことだ。(i-dea)



2年間に及ぶ英国F3での武者修行を終えて、81年末に帰国した鈴木利男。溢れるファイティングスピリット、誠実な人柄、端正なルックスでたちまち人気を集めた。(CGL)



コースインの前に、ピット裏の待機場までマシンを押しチーム・ハルクニ・Tのメカニックたち。「たしか、このツナギも日本で作ったはず」とハルクニさん。(BA)

「一緒に渡米したんです」  
レースを本格的に始めるにあたって、父と交わした約束は、奇しくもこのような形で守られたのだ。父は「帰国後は会社を興してトヨタの販促のお仕事を手伝ったり、『カローラ』っていうブランドで自動車フロアマットの製造を展開したり、おかげさまで今年で32期目を迎えました」  
そんなハルクニさんの元に、トヨタからチーム監督のオファーが届いたのは、81年初秋のことだった。  
「実は、79、81年にも、レーシングチームの監督をしていたんです。ウォルター・ウルフ・レーシングっていうチーム。当時まだ若手だった関谷正徳を富士GCに起用して優勝したり、ケケ・ロズベルグとかマイク・サックウェルなんかをF2で乗せたり。それがコストの割に、なかなか注目を集めていたんですね」

でも友達になっちゃった。綺麗な外見とはウラハラに、実にサッパリしたボーイッシュなコでね。そのうち、僕の会社にしよっという遊びにくるようになって。当時、飲み屋のコが集金に来ることは、時々あったけどさ(笑)。社員はビックリするよね。若い女のコが遊びに来ちゃうんだから」  
「だから、マルティニはマルティニでも、欧州のように、ベルモット・メーカーからサポートを受けたわけじゃない。あくまで、日本でマルティニ・ブランドのダブルを展開しようとした商社からのバックアップだったというわけです」

こうして、チーム・ハルクニ・Tの82年シーズンは幕を開けた。事実上のトヨタ・ファクトリーとあって、当然のことながらライバルたちのチェックも厳しい。だが、開幕戦の筑波で2位、続く第2戦の西日本(のちのMINEサーキット)では優勝と、これ以上ない滑り出しをみせる。名將・ハルクニの面目躍如、といったところだ。  
「もちろん、チームのポテンシャルも高かったけど、なによりトシオが凄かった。開幕戦の筑波なんて、予選2番手からのスタートだったんだけど、トップの星野をカアカア追い回して、アウトから抜こうとしたり。『おいおい、普段あんなにおとなしいヤツが、あそこまでやるか?』って。ウチのピットだけじゃないんだよ。他チームの連中まで、トシオの走りを見て『ウオー』とか言ってるさ(笑)」

ハルクニさんのそんなお話に、90年のF1開幕戦・フェニックスGPで、世界チャンピオンのアイルトン・セナ相手に、果敢なアタックをみせた若き日のジャン・アレージの姿が浮かんだ。あの日、アレージの、常識外れ、な振る舞いに、チームオーナーのケンティレルは、目を覆う仕草でおどけながらも、妙にハシャいでモニタに見入っていた。おそらくはハルクニさんも、星野に敢然と挑む鈴木利男の姿を、ケンティレルと変わらぬ心持ちで見守っていたハズだ。  
そしてなにより、トシオという新たな逸材を得て、ドライバーとして叶わなかった世界への挑戦が、今度はチーム監督として再チャレンジできる可能性が広がり始めたのだ。レース後、ジャン・パン・ファイトに興する愛弟子の姿に、さわやかに吹き抜ける春風の中、ハルクニさんは、たしかな手ごたえを感じていた。  
(文)本誌 早田 禎久

### MARTINI RACING ミニ・デイパック

今回は、MARTINI&ROSSIの広報担当、ファンチョット女史から届いたマルティニグッズの中から、MARTINI RACINGのミニ・デイパックをプレゼント。500mlサイズのボトルとタオル、そしてTシャツが収まるサイズです。アウトター(ウォーター・プルーフ加工済み、汗にも雨にも強く、ランナーやサイクリストのあなたにピッタリ。右記要領に添ってご応募ください。

□応募要領  
プレゼントをご希望の方は、希望賞品名、郵便番号、住所、氏名、年齢、性別、職業、今後「レーシング・ストライプの軌跡」で取り上げて欲しいスポンサー名やご意見を明記の上、ハガキにてご応募ください。〆切は2008年5月26日(月)必着。  
□宛先  
〒101-8419 東京都千代田区神田神保町2-2  
(株)ニ玄社 NAVI編集部 [MARTINIミニ・デイパック]係



「口幅の広い方でですけど、それがトヨタ内部で評価されて、フォーミュラ・パンフィック(以下、FP)のチーム・マネジメントを任せたい、と。FPっていうのは、F2(現在のフォーミュラ・ニッポンに相当)とF3の間に位置したカテゴリー。最大排気量は1600ccで、日産とトヨタがエンジン・サプライヤーとして積極的に参加して、マカオGPも、82年までこのFPで競われていましたね。で、パンフィック(太平洋)があるということは、当然、アトランティック(大西洋)もあるわけで、こちらもレギュレーションはほぼ同一。そこで、F1Aのスポーツ統括部門であるFISAが、このふたつを統合して、新たに「フォーミュラ・モンディアル」を創設して、

第4の世界選手権として開催する構想を立ち上げたんです。このシリーズに興味を持ったトヨタが、僕に声をかけてくれた、というわけです」  
こうして誕生したチームの名は、チーム・ハルクニ・T。チーム名の最後のTは、タカハシのTであり、トヨタのTであった。  
「それと、トシオのTっていうのもいい

かもしれない」とハルクニさん。そう、この新チームが誕生するためのもうひとつの要素として、81年限りで英国F3での武者修行を終え、日本に帰国した鈴木利男の存在があった。  
「実は、ウルフ時代にも2度ほど、彼を起用してFPを戦ったことがあって。とにかく、他の日本人ドライバーにはない気迫がすごかったし、ルックスもいい。すべからくスターになる要素を

兼ね備えていた。トシオという存在があったからこそ、本気でチーム作りに取り組んだといっても過言ではありません」  
マシンはその前年、i&rレーシングで中嶋悟が走らせたマーチ81A。カンのいい方ならお察しの通り、車名の「A」はアトランティックの「A」を示す。エンジンはトムス・チューンの2T1G。現トムス社長の太岩湛矣

が手塩にかけて組み上げたパワーユニットだ。シャシーメンテナンスは、パテの愛称でおなじみのベテラン・メカニック、佐藤正幸が率いるセルモに託され、チーフメカニックには円乗邦弘が指名された。タイヤはハルクニさんと長年の付き合いであるブリヂストン。錚々たる布陣である。  
チームの活動費はトヨタの丸抱え。とはいえ限りはあるわけで、スポン



欧州では、タバコ同様、酒類に関する広告規制が存在する。写真はモンテカルロ・ラリーに登場したランデア・デルタ・インテグラール。おなじみのステッカーに「SPORTLINE」と入れ、あくまでダブルのPRとしている点に注目されたい。鈴木利男のFPマシンに貼られたステッカーにも、同様のロゴが見て取れる。(PDA)



おなじみのマルティニ・ステッカーが貼られた第6戦・筑波。円乗チーフに代わって、代打で登場した土沼廣芳メカ(現チーム・ルマン社長)に何かを伝える鈴木利男。(i-dea)